

水曜通信22

東北学院宗教センター編

2022年
11月

第57回 水曜公開礼拝

2022年11月16日(水) 18:30 - 19:00



説教：木村 純二（本学文学部教授）
奏楽：椎名 雄一郎（本学文学部教授）

<礼拝次第>

前 奏：G.ベーム作曲 コラルル・パルティータ
《愛する神にのみ従うもの》Ver.1~6
讃美歌：『讃美歌21』387番「刈り入れの主を」
聖 書：ヨハネによる福音書 15章1-5節
讃美歌：『讃美歌21』393番「こころを一つに」
説 教：「主につながり結ぶ実」
頌 栄：『讃美歌21』29番「天のみ民も」
後 奏：G.ベーム作曲 コラルル・パルティータ
《愛する神にのみ従うもの》Ver.7

後奏の後、椎名 雄一郎（本学文学部教授）のオルガン演奏による賛美を行います。

収穫を神に感謝する

アメリカでは毎年11月の第4木曜日に「感謝祭(Thanksgiving Day)」が行われます。この日は家族や親しい友人らと、オーブンでじっくり焼きあげた七面鳥(ターキー)を食べるのが恒例です。この祭の起源は、宗教弾圧から逃れて1620年にイギリスから新大陸アメリカに渡ってきた最初の移民団「ビルグリム・ファーズ」に由来します。彼らが上陸したのが、収穫の時期が過ぎ、本格的な冬が始まる11月の厳しい季節でした。彼らの約半数が厳冬を越えられずに命を落としましたが、生き残った人々が大地を耕作し、得られた最初の収穫を神に感謝したのが、この祭のはじまりです。この祭には野生の七面鳥の獲り方や作物の栽培方法など助言をくれた先住民たちも招かれて祝われました。

私たちが得る「収穫」はただ自力によるものではなく、他者の協力をはじめ、この世界を支配する神の助けによるものであり、感謝してこれに与るといふ、キリスト教的な精神を再確認するのがこの祭です。冬支度が始まるこの季節、東北学院での学びを通して、一人ひとりに豊かな実りの収穫が得られますように。

(宗教センター主任・大学宗教部長 原田 浩司)

次回第58回水曜公開礼拝は12月21日です。

第56回 水曜公開礼拝報告（説教：野村 信、奏楽：今井 奈緒子）

2022年11月2日（水） 公開オンライン礼拝

讃美歌：301番「やまべにむかいて」
聖書：マタイによる福音書 21章33-46節
讃美歌：453番「きけやあいのことばを」
説教：「良く生きる」
頌栄：544番「あまつみたみも」



【説教要旨】

ブドウ園の警えです。主人が旅立った後、雇われた農夫たちがこのブドウ園を自分たちのものにしようと、主人から遣わされた僕たちを殺し、最後には主イエスを殺してしまいます。農園とはこの世界であり、農夫たちとは人類のことを指しています。私たちはこの農園に雇われ、良い実りを得るように働かせていただいています。詳細は「水曜公開礼拝」10月配信の動画を視聴してください。（宗教センターチャプレン 野村 信）

前奏：G.A.ホミーリウス（1714-85）
コラール前奏曲 「愛する魂よ、汝を飾れ」
後奏：J.L.クレープス（1713-80）コラール編曲
「私のイエスを離さない」

前奏と後奏の作曲者はいずれもJ.S.バッハに作曲と鍵盤楽器の奏法を学び、教会音楽の分野で新しい時代を拓きました。ホミーリウスはドレスデンの当時の主要三教会で音楽監督を、クレープスはアルテンベルク城教会のオルガニストを勤め、師のカンタータやオルガン作品に精通する者たちならではのコラール作品を残しています。（本学教養学部教授・大学オルガニスト 今井 奈緒子）



礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：今井 奈緒子）

J.S.バッハ（1685-1750）
《ライプツィヒ・コラール》より
「いと高きところにいます神にのみ栄光あれ」 BWV663
「いざもろびと 神に感謝せよ」 BWV657
前奏曲とフーガイ長調 BWV536

バッハはヴァイマルの宮廷オルガニストを務めていた頃に手がけたコラール編曲を、後年ライプツィヒで再び取り出し改訂や補筆を施しました。それらの十数曲は、《ライプツィヒ・コラール》と呼び習わされています。ラテン語のグローリアGloriaのドイツ語による歌詞を持つ「いと高きところにいます神にのみ栄光あれ」は、ライプツィヒ・コラール集の中に調性や形式の異なる3つの編曲が存在し、他にもオルガン用に8つの編曲が存在することから、バッハがこのコラールの内容と旋律の運びを特に好んだことが窺われます。今日演奏する編曲では、「カンタービレ」（歌うように）と表記された流れのある動きを伴奏に、コラール旋律がテノールの音域に登場します。一方「いざもろびと 神に感謝せよ」は神の奇しき御業を讃える歌です。堅牢な印象を与える伴奏部分に、コラール旋律がファンファーレのごとく奏でられます。前奏曲とフーガイ長調はヴァイマル時代後期に作曲されました。分散和音の支配する爽やかな前奏曲に続いて伸びやかなテーマを持つフーガが紡がれていき、満ち足りた気分を上り下りする音型が彩った後、バッハ得意の粋な終始を迎えます。（今井 奈緒子）



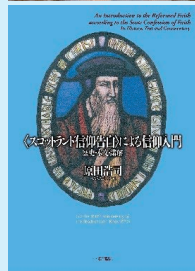
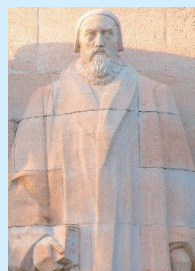
スコットランドの宗教改革者ジョン・ノックス没後450周年

ジュネーヴ大学には宗教改革記念碑が設置されており、その地の宗教改革に大きく寄与した4人の巨大な像が並び立っています。この4人の中で一番左（私たちから見ると一番右）に居るのが、スコットランド人のジョン・ノックス（John Knox）です。

イングランドのメアリ女王によるプロテスタント弾圧を逃れて来た大勢の人々のための教会の牧師として、ノックスはカルヴァンの協力者として働き、その後、祖国スコットランドに戻り、1560年に宗教改革を成し遂げました。こうして、スコットランドのプロテスタントはカルヴァンの改革派の路線が定着し、聖書もジュネーヴ聖書と呼ばれる英訳聖書が使用されるようになりました。

今年、2022年はノックス没後450周年にあたり、彼を記念するイベントが各国で催されました。東北学院には「宗教改革の『福音主義キリスト教』の信仰に基づく…」という建学の精神があり、最初に「宗教改革」の文字が置かれます。更に「東北を日本のスコットランドに」という言葉も東北学院に受け継がれてきました。今年の、スコットランドの宗教改革者ジョン・ノックスの没後450周年を照準に、彼による「スコットランド信仰告白（1560年）」を解説した拙書が刊行されています。お読みいただければ幸いです。

（宗教センター主任・大学宗教部長 原田 浩司）



— 建築が語る東北学院の歴史（14） —

年月を経過した秋保石の重厚さが印象的な本館の建物にあって、玄関の上部に一列だけ、色を違えた帯状のレリーフが嵌め込まれています（図1）。小誌前号で紹介した図象の中央に、盾形と文字（記号）が重ねられた形のレリーフです。さらに目を凝らして見ると、十字架（+）と「T」が一組を成し、これが規則的に配置されていることがわかります（+T / T+ / +T / T+）。

盾は、中世の欧州で生まれた紋章の基礎となる要素で、信仰精神を象徴するものと言われます。一方、大学のシンボルとしての紋章は、欧米の歴史あるカレッジはもとより、日本のキリスト教系学校にもしばしば見られます（立教学院、青山学院など）。中央の「T」は東北学院の頭文字をとったものと考えられますが、+とTが本館正面の中央に組を成して掲げられていることが象徴的です。聖書の教えに基づく教育を旨とする東北学院が新たに土樋にキャンパスを建設するに際し、新たなキャンパスのシンボルとして考案されたものと想像されます。（工学部 崎山 俊雄）



図1：本館の玄関上部のレリーフ

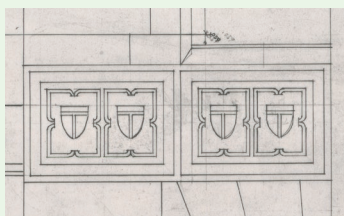


図2：図1部分の設計図

宗教改革者カルヴァン（2）ジュネーヴ学院（無料義務教育機関）

スイスのジュネーヴで始まった社会的な活動の一つに国際赤十字があります。戦場で負傷する人々に心痛めたアンリ・デュナンは、敵味方なく救護する活動を1864年に始め、現在世界中にその活動は展開しています。この町から行政、教育、福祉といった幾つかの領域に近代社会の萌芽を見ることができ、私たち日本では周知の教育制度である「全児童無償義務教育制度」について紹介します。

裕福な児童や優秀な子弟を対象とする教育は、ヨーロッパ各地で早くから始まっていましたが、全児童に無料で教育を施すという政策を宗教改革者カルヴァンとその協力者が16世紀に実施したことは画期的なことでした。実際、近隣の都市から、すぐに行き詰ると見られていたのです。しかし、「ジュネーヴ学院（Académie de Genève）」と命名されたこの学校は、施設、教員、資金のいずれも整えられ1559年に開校しました。

初等・中等学校（Schola private）では、16才以下の男子児童全員が中等教育を受けることが義務付けられ、専門大学院（Schola Publica）では、神学部を中心に人文学部などが設置され、国境を越えて学生を受け入れ、国際色豊かな専門教育を施しました。

この学校での教育方針はヨーロッパ中に広がり100年もしない内に各地に今日では名門校となった学校が建てられました。ジュネーヴ学院は学部を加えて1873年にジュネーヴ大学に改組して今日でも神学や国際法など著名な大学として知られています。（宗教センターチャブレン 野村 信）



1600年代のジュネーヴ

美術による賛美（16）仙台のフェルメール 11月27日まで



今、仙台の宮城県美術館にフェルメールの名作「窓辺で手紙を読む女」が来ています。「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」。11月27日まで。この絵は1974年にドレスデン美術館展で日本に来て展示されましたが、その時は背景は無地の壁でした（右写真）。その後2017年以降の修復によって、上塗りが除去されて、背景の壁にキュービッドが現れました（左写真）。それによって手紙が恋文であることがわかり、またキュービッドが仮面を踏んでいることから、仮面の偽りの愛ではなく、誠実な愛を示していることもわかるようになりました。絵全体を隠している緑のカーテンは右に手繰られています。これは聖なるものの顕現です。全ての細部が輝いている感動的な絵です。しかしこれは日常の些事でしかありません。このような風俗画そして静物画を描くのは当時ヨーロッパ最大の物質文明を誇ったオランダでした。日本まで来て東インド会社で交易したオランダです。



物質は当然のことながら、過ぎゆくもので虚しいです。しかしそれは旧約思想です。それに対して、神が自ら虚しくなること（受肉：「フィリピの信徒への手紙」2：6-7）によって、その虚しい世界を肯定する。それがキリスト教です。フェルメールの世俗画そしてオランダの静物画は、キリスト教の物質肯定の現れなのです。（理事長特別補佐「宗教センター担当」 鐸木 道剛）



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第22号

2022年11月8日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

東北学院宗教センター TEL：022-264-6558

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp